

# 文章構造における冒頭文と末尾文の統括機能と形態上の特徴

—— 頭括型と尾括型の要約文の分析を通して ——

木 戸 光 子

## 1. はじめに

本稿では文章における文の出現位置と統括機能との関係を明らかにするために、文章の冒頭文と末尾文の形態上の特徴を考察する。文章データとして新聞コラム記事を読んで頭括型および尾括型の双方で要約文を書くという課題作文を日本人大学生29名に書いてもらい、頭括型の要約文の冒頭文と、尾括型の要約文の末尾文について、文章論の枠組みを用いて形態上の特徴を比較した。

## 2. 文章における統括と文の出現位置

### 2.1 文章における文の統括機能

統括とは、文章のある部分が文章全体と関連づけられる中で、文章の内容を「くくりまとめる機能」(市川1978)であり、文章全体を意味の上で「締めくくる役割」(永野1986)であると文章論では定義されている。以下、市川(1978)と永野(1986)、さらに文法論の立場から寺村(1990)を引用する。

ここに「統括」というのは、なんらかの意味で、文章の内容を支配し、または、文章の内容に関与することによって、文章全体をくくりまとめる機能をいう。文章中のある部分が統括機能をもつことによって、その文章全体は、二段または三段に大きくまとめられる。(市川1978:157)

「統括」とは、文章を構成する文の連続において、一つの文が意味の上で文章全体を締めくくる役割を果たしていることが言語形式の上でも確認される場合、その文の意味上形態上の特徴をとらえて文章の全体構造における統一性と完結性とを根拠づけようとする文法論的観点である。(永野1986:315)

「構造」というのは、一般に、自動車とか人間の身体とか、一国の法体系とかのように、いろいろな種類の部分から成っているが、それぞれがバラバラに、ただ集まっているというのではなく、自分の役割をはたしながら他の部分と関係しあい、全体として一つの統一体をつくっている、そういうものをさしている言葉である。文章をそのような構造体として考えるということは、それがまずどういう部分から成っているか、それがどのような成分を構成し、どのように層をなしているか、それぞれのレベルでの部分の役割は何か、それらがお互いに、あるいは他のレベルと、あるいはその文章全体と、どのような関係をもっているか、といったことを考えることである。そこでは、部分部分の意味表現的な機能が、他の部分とどう関係し、統一体としての文章を成り立たせているか、という点が関心の中心になってくる。(寺村1990:11)

市川と永野に共通するのは、1) 文章の部分が文章の全体と関連していること、2) その関連性は言語形式という形態上の特徴が文章の部分に現れること、である。文章が構造として成り立つための統一性と完結性を根拠づけるものとしてある特定の形態上の特徴を有する文章の部分に着目している。

寺村(1990)は、文法論の立場から、特定の形態上の特徴を有する文章の部分について、構造とは何かを考える中で「自分の役割をはたしながら他の部分と関係しあい、全体として一つの統一体をつくっている」と述べている。この「役割」が「部分部分の意味表現的な機能」であり、「部分部分」とは文章における言語形式だと考えられる。

本稿で問題にしたいのは、以上に示された「部分」が文章の一部である場合、文章の一部としての冒頭文や末尾文と、文章の全体構造との関係である。特に、文章構造において冒頭あるいは末尾に位置する文について「くくりまとめる機能」「締めくくる機能」としては同じ機能を有するが、個々の文章において異なる言語形式を有する場合を明らかにしたい。文法論では言語形式についての文法的な機能を問題とすることが多く、同一あるいは類似の言語形式について詳細な意味用法を記述することによって文法的機能を特定する。一方、文章論では文章構造上の機能を特定するのに同一あるいは類似の言語形式が手がかりとなるという観点から文章構造上の機能を問題とする。したがって、言語形式の語法的な意味用法が最終的な研究目標とはならず、文章構造上の機能の解明

が最終目標である。

## 2.2 文の出現位置と文章構造類型と冒頭文・末尾文

本稿では文の出現位置との関係で文章構造類型を分類する。文章の冒頭から末尾までのどの位置にどのような文章構造上の機能を有する文が出てくるかということが問題になる。以下の図1に示すように、文章構造類型を頭括型、尾括型などに分類する場合は、文章のどの位置に文章全体をまとめる統括機能を有する文が出現するかが問題とされる。

	はじめ	なか	おわり
1) 頭括型	■	□	□
2) 尾括型	□	□	■
3) 双括型	■	□	■
4) 中括型	□	■	□
5) 散括型	■	■	■
6) 無括型	□	□	□

■ = 文章を統括する文      □ = その他の機能の文

図1 文章を統括する文の出現位置による文章構造類型（寺村他1990，市川1978，木戸1992参照）

ある1つの文を切り離して見た場合、その文が文章中のどのような部分なのか直感的にわかる場合とわからない場合がある。たとえば、「したがって」という接続表現で始まる文の場合、文章の冒頭に出現するとは考えないだろう。また、「そのように」という指示表現で始まる文の場合も同様である。一方、「～とは～である。」という定義の表現を含む文はどうか。定義を述べてから説明する場合なら冒頭、説明をした上で定義を述べる場合なら末尾であろう。さらに、「～は～。」という提題表現「～は」で始まる文の場合は、冒頭か末尾かは1つの文だけ見ても直感的には出現位置は予想できないだろう。

このような考察を踏まえて、本稿では同じ文章について頭括型と尾括型の2種類の要約文を日本語母語話者に書いてもらい、頭括型の要約文の冒頭文と尾括型の要約文の末尾文の比較を行った。なお、本稿では以下の仮説を検証する形で論を進める。

〈仮説〉 **頭括型の要約文の冒頭文 = 尾括型の要約文の末尾文？**

同じ意味内容なら同じ形態上の特徴を有するのか。もしそうでないなら、文章の冒頭と末尾において、同じ意味内容の場合に形態上どのような違いがあるのか。その形態上の違いは文章構造において何を意味するのか。

つまり、同じ意味内容の文なら文章の冒頭でも末尾でもどちらに出現しても同じ言語形式、すなわちまったく同じ文が冒頭と末尾に来るという出現位置の違いしかなくてもいい、言い換えれば、出現位置の違いによって頭括型と尾括型のどちらかが決まるのではないかということである。さらに、もし頭括型と尾括型で異なるなら、文章の冒頭と末尾という出現位置以外に、冒頭と末尾に来る文は文章の部分としてどのような文章構造上の機能が関係しているのかということである。

### 2.3 文章構造類型と現実の文章との差

要約文ではなく、文配列課題による文章構造類型の調査を行ったものとして、本名(1989)、杉田(1994)、館岡(1996)などが挙げられる。しかし、これらは文の並べ替えをするだけで、並べ替えた文の書き換えはしていない。本稿で要約文をデータとしたのは並べ替えられた文について出現位置以外の形態上の相違はないかを明らかにしたいためである。

木戸(2001)では「4月入学と9月入学とどちらのほうがいいか」という題でB5紙1枚に作文を書くという課題作文を日本人大学生27名に書いてもらった。以下の例1～例3に挙げるように、例1の頭括型は「主張」→「理由」の順、例2の尾括型は「利点」→「主張」の順になるが、実際には「理由」と「利点」に挙げられた内容は類似している。例3の双括型の冒頭文と末尾文は同じ内容だが、末尾文に冒頭文にはない「以上の点から」という接続表現がある。

#### 例1 [頭括型] 「主張」を述べて、「理由」を挙げる

①私は4月入学の方がよいと思う。②その理由としては、まず気候がある。③寒い季節が終わり、様々な動植物がその活動をはじめ春は生命力にあふれている。④暑くも、寒くもないこと季節はものごとをはじめののに大変適している。⑤つぎに、日本人が昔から好む「桜」が咲くころでもあり、祝い事をさらにめでたくできる。⑥これは私がずっと日本で育っている（さらに入学式＝

桜ということが可能な地域で) からかもしれないが桜のない入学式は考えられない。

### 例2 [尾括型] 問題提起をして「利点」を挙げて、「主張」を述べる

①4月入学と9月入学とでは、どちらの方が良いか、といっても、様々な条件下では双方に利点がある。②まず、4月の方が良い場合の条件としては、入学試験が現在日本での主流である、2～3月の時期に行われる場合である。③次に、9月の方が良い場合の条件としては留学をしようと考えている場合である。④しかしこの特別な場合の条件づけを無視して日本での生活スタイルのみを考えてみると、やはり新しい生活のスタートは、花のつぼみが開いていき、新しい命のパワーみなぎる春が一番日本においては似つかわしいように思う。⑤9月といえば自然界における休息の時または忍耐の時である冬の支度をする秋を向かえる時期である。⑥四季の移りかわりに命のサイクルを読みとる日本の文化の中では、やはり4月入学がふさわしいように思われる。

### 例3 [双括型] 「主張」を述べて、「理由」を挙げて、最後に再び「主張」を述べる

①私は、4月入学のままでいいと思います。②その理由は2つあります。③まず、一つ目に、日本は四季がはっきりと区別できる風土の国で、春の桜が咲くなかでの入学式は、長い間続いてきた日本の習慣で、日本人の心に何か思いをのこすものだからです。④私は、たとえ他の多くの国とちがっていても、日本でのやり方を大切に守っていきたいと思うのです。⑤つぎに、二つ目の理由を述べます。⑥他の多くの国と異なる事で問題となるのは留学などをする時に日本とづれているために半年間、新学年が初まるのを待つことになったり、することではないでしょうか。⑦でも、それはかえって準備のために利用できる、有意義なものとなるのではないかと思うのです。⑧以上の点から、私は日本の4月入学の制度は、このままでよいと思います。

このように、「主張」「理由」「利点」という意見文の部分としては同じ機能を有し、かつ意味内容もほぼ同じ文であるにもかかわらず、言語形式はそれぞれの文で異なっている。言語形式中心の語法的な分析・記述を目指すなら、言語形式が異なれば意味も異なるということになるだろう。しかし、文章構造の解明のためには、異なる言語形式がなぜ同じ文章構造上の機能を有するのか

問題になる。そこで、文章構造上同じ機能を有する異なる言語形式を特定した上で、それらの言語形式が選択される条件は何かを再検討するということになる。

### 3. 頭括型の要約文の冒頭文と尾括型の要約文の末尾文の比較

#### 3.1 文章データ

本稿の文章データは、29名の日本人大学生に、1つの新聞コラム記事をもとに、文章全体の主張が冒頭にある頭括型、および、主張が末尾にある尾括型という2つの型の要約文を書いてもらい、頭括型の冒頭文と尾括型の末尾文の形態的な特徴を分析したものである。頭括型の要約文29例で、1文章平均4.9文、尾括型の要約文29例・1文章平均5.5文である。原文はサンリオのキティ開発にまつわる新聞コラム記事（「キャラクターの開発と育成」鈴木賢治サンリオ企画制作部長の講演内容の記事、『生産性新聞』1993年8月14日、全42文）である。

#### 3.2 方法

文章論の枠組みにおいて以下の形態上の特徴にしたがって分析・記述した。「**提題表現**」「**接続表現**」「**指示表現**」「**叙述表現**」は寺村他（1990）を参照し、「**評価表現**」は渡辺（2007）および中井（2006）を参照した。

「**提題表現**」文章や談話の話題を示す表現。構文論では、係り（・提題）助詞の「ハ」を伴う名詞句を「文の主題」というが、それより広い表現形式を指す。

「**接続表現**」接続詞や接続助詞および、それに相当する機能を持つ語句（副詞・名詞・連語等）や文等。「文の接続関係」文や段落のような比較的大きい内容上のまとまり（言語単位）をつなぐ接続表現の意味的な関係。

「**指示表現**」「**コノ**」「**ソノ**」といった指示詞だけでなく、その後に続く名詞の部分も含めて、ひとまとまりとしてみた表現で、そのひとまとまり全体で指示語と同じように文章・段落や場面の中の他の部分を指し示すもの。

「**叙述表現**」提題表現と呼応して文を構成するもの。述語は叙述表現の中心的

な役割を果たす。述語の持つ表現形式。 文→提題表現+叙述表現

例：文→Xハ+Yスル（動詞型述語）

文→Xハ+Yイ（形容詞型述語）

文→Xハ+Yダ（名詞型述語（形容動詞も含む））

（以上，寺村他1990）

「評価表現」「会話参加者が話題の内容や情報について，形容詞，形容動詞，副詞，動詞等を用いて，自らの意見・感想（善し悪し，好き嫌い，価値，喜怒哀楽）を表す，またはその共感を表す発話（中井2003：233）」と定義した。この評価表現とは，「大変だねー。」や「日本語うまいですね。」のように，論説的な文章では意見文にあたる表現と言える。」（渡辺2007：68）

### 3.3 結果と考察

#### 3.3.1 文章構造における形態上の特徴

以下，頭括型の要約文と尾括型の要約文の例を挙げる。なお，斜字は頭括型の冒頭文と尾括型の末尾文，下線は形態上の特徴を表す。文番号の見方は，以下のとおりである。

例 100901：10 頭括型の文章番号，09 文章番号＝被験者番号，01 文番号  
110901：11 尾括型の文章番号，09 文章番号＝被験者番号，01 文番号

#### 例4-1 [頭括型]

100901 良いデザイナーとは一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができる人のことである。

100902 いくら絵を描くテクニックが上手でも完璧を目指して絵の中に何でも入れてしまい，顧客の感性を奪ってしまうようなデザイナーの描く絵からは何も語りかけられるものがなく思い出すものもなく，絵の中へも入ってゆけない。

#### 例4-2 [尾括型]

110901 デザイナーが絵を描くにあたり，その絵の中に何でも入れてしまっはいけない。

110902 もしそうしてしまうと顧客の感性を奪ってしまい，その絵からは何も語りかけられるものもなく，思い出すものもなく，絵の中へも入ってゆけない。

110903 したがって，良いデザイナーとは一枚の絵を通して顧客と感性のキャ

チボールができる人のことである。

#### 例5-1 [頭括型]

102801 よいデザイナーとは、一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができるデザイナーである。

102802 例えば、ピアノを弾くキティを描く場合、キャラクターの設定を思い浮かべてストーリーを考える。

102803 そうした絵は、顧客の感性に触れる。

102804 一般にデザイナーは完璧を目指して絵の中に何でも入れてしまおうとする。

102805 そうした絵は顧客に受け入れられない。

102806 顧客の感情を移入できる余地のある絵が受け入れられるのである。

#### 例5-2 [尾括型]

112801 サンリオには多くのデザイナーがいるが、その中でキャラクターの『気持ち』を描けるデザイナーは少ない。

112802 例えば、ピアノを弾くキティを描く場合、良いデザイナーはキャラクターの設定を思い浮かべながらストーリーを考える。

112803 そうした絵は、顧客の感性に触れる。

112804 一般にデザイナーは完璧を目指して絵の中に何でも入れてしまおうとする。

112805 そうした絵は、顧客に受け入れられない。

112806 顧客の感情を移入できる余地のある絵が受け入れられるのだ。

112807 一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができることが良いデザイナーの条件である。

#### 例6-1 [頭括型]

100201 サンリオにとってよいデザイナーとは顧客の感性とキャッチボールできるデザイナーのことである。

100202 サンリオのキティがピアノをひくときには、初めてピアノをひくときの私達と同じ気持ちでひくキティが描けるということであるが、そのようなデザイナーはわずかである。



例6-2 [尾括型]

110201 無表情であるキティがこれほどまでに「かわいい」と思われているのは、こちらが感情移入できるからである。

110202 それは見る方が寂しい時には悲しげに見え、嬉しい時には笑ってみえる分である。

110203 そんなキティを書くデザイナーとは、顧客の感性とキャッチボールできるデザイナーである。

110204 そして、そんなデザイナーこそ、サンリオが必要としている人材なのだ。

表1は頭括型の要約文の冒頭文と尾括型の要約文の末尾文の形態上の特徴をまとめたものである。

表1 頭括型の要約文の冒頭文と尾括型の要約文の末尾文の形態上の特徴

(N:名詞)

文章構造における形態上の特徴	頭括型の要約文の冒頭文	尾括型の要約文の末尾文
提題表現	とは 17 というのは 1 は 6 が 5	とは 12 は 7 が 11 こそ 2
接続表現		つまり 6 すなわち 2 したがって 4 だから 2 そして 2 しかし 1
指示表現	それ 2 これ 1	それ 2 それら 1 そんなN 2 そのようなN 1 そのN 2 そのためのN 1 そうするためにも 1 そういったN 1 そういったことを考えると 1 こうしたN 1

		こうしたことから	1		
		このN	1		
		ここで言われている	1		
叙述表現	のである	1		のである・のだ	8
	と思う	2		と思う	2
				だろう	1
*評価表現	よい	26		よい	20
	理想的N	1		理想的	1
	素晴らしい	1		素晴らしい	2
	もっともだ	1		筋がおっている	1
				ふさわしい	1

以上、表1から次のことがわかる。

### (1) 頭括型の冒頭文の特徴

頭括型の冒頭文は、単純な構造の文からなる。「よいデザイナーの条件とは～である。」文章を統括する機能を有する言語形式により冒頭文であることを示さなくてもよい。

### (2) 尾括型の末尾文の特徴

尾括型の末尾文は、文章を統括する機能を有する様々な言語形式を含むことによって、複雑な構造の文からなる。末尾に来るといふ文の位置に加えて、提題表現の「が」「こそ」、接続表現の順接型「したがって」「だから」、同列型「つまり」「すなわち」等、主にそ系の指示表現、叙述表現におけるいわゆる「のだ文」の使用など、統括機能を有すると考えられる形態上の特徴がある。

つまり、同じ意味内容の文でも、頭括型の冒頭文に比べて尾括型の末尾文のほうが文章構造においては文章全体を統括する機能を有する言語形式が使用される傾向がある。

## 3.3.2 頭括型の冒頭文と対応する尾括型の末尾文の比較

ここで再度2.2で論じた問題を考える。3.3.1でわかった結果は文章の冒頭が重要であるという点で、ある意味常識的な結果だとも言える。つまり、冒頭はすぐにわかる出現位置だが、末尾はそこで何らかの終了を示す言語形式がなければ認識できないものであろう。頭括型の冒頭文に比べて尾括型の末尾文のほうが文章構造における統括機能を有する言語形式が使用されるのは、終了を示

すものが出現位置だけでは特定できないためと考えられる。

ここでは「同じ意味内容の場合に形態上どのような違いがあるのか」という問題を検討するために、さらに例を詳しくみていく。なお、以下の例にある下線・網掛けは筆者が後から引いたものである。また、(頭)頭括型の冒頭文、(尾)尾括型の末尾文、を指す。

まず、例7のように頭括型の冒頭文と尾括型の末尾文がまったく同じ場合が1例のみあった。

#### 例7 頭括型の冒頭文と尾括型の末尾文がまったく同じ場合

##### 1) (頭) と(尾) がまったく同じ

(頭) 101401 よいデザイナーとは絵を通して顧客と感性のキャッチボールができるデザイナーである。

(尾) 111404 よいデザイナーとは絵を通して顧客と感性のキャッチボールができるデザイナーである。

次に、例8において、頭括型の冒頭文にはないが、尾括型の末尾文には統括機能を有する言語形式がある場合のうち、接続表現、指示表現、叙述表現の「のだ文」が使用されている場合を挙げる。なお、以下の3)のように「こうしたことから」のように「接続表現」と「指示表現」の組み合わせとさえ考えられるものもある。

#### 例8 尾括型の末尾文に統括機能を有する言語形式がある場合（接続表現・指示表現・叙述表現）

##### 2) (尾) に接続表現がある

(頭) 101501 サンリオが望む理想的デザイナーは、顧客との感性のキャッチボールができ、顧客が自分の感情を移入できる余地を残せるデザイナーである。

(尾) 111509 したがって、サンリオが望む理想的デザイナーは、顧客との感性のキャッチボールができ、顧客が自分の感情を移入できる余地を残せるデザイナーである。

(頭) 102101 サンリオにとっての、よいデザイナーとは、一枚の絵を通して、顧客と感性のキャッチボールができ、顧客が自分の感情を移入できる余地を残すことができる、気持ちを描けるデザイナーである。

尾) 112104 つまり, サンリオにとってのよいデザイナーとは、一枚の絵を通して、顧客と感性のキャッチボールができ、顧客が自分の感情を移入できる余地を残すことのできる、気持ちを描けるデザイナーのことである。

### 3) 尾) に指示表現がある (接続表現的)

頭) 102301 サンリオにおけるよいデザイナーの条件とは、一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができ、また見る人が感情移入できる絵を描けることである。

尾) 112313 こうしたことからサンリオにおけるよいデザイナーの条件とは一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができ、また見る人が感情移入できる絵を描けることである。

### 4) 尾) に指示表現がある

頭) 101101 サンリオの場合のよいデザイナーというのは1枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができる人である。

尾) 111103 それら条件を満たす人は1枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができる人である。

### 5) 尾) の叙述表現が「のだ文」になっている

頭) 100801 よいデザイナーの条件 - サンリオの場合は、一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができる人のことである。

尾) 110803 だから, よいデザイナーの条件 - サンリオの場合は、一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができる人のことなのである。

さらに、例9において、頭括型の冒頭文にはないが、尾括型の末尾文には統括機能を有する言語形式がある場合のうち、同じ「提題表現」でも異なる言語形式が使用されている場合を挙げる。これらの例の中に、題述関係が逆になる文が含まれている(6-1, 6-2の例)。また、頭括型の冒頭文では1文だったのが尾括型の末尾文では2文になっている場合もある(6-3の例)。

## 例9 尾括型の末尾文に統括機能を有する言語形式がある場合(提題表現)

6) 頭) と尾) で提題表現が異なる —— 頭括型の冒頭文の主部+述部が、尾括型の末尾文で逆になっている

6-1) 頭)「とは」—— 尾)「が」 頭)「XとはY」⇔ 尾)「YがX」

頭) 102801 よいデザイナー とは，一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができるデザイナーである。

尾) 112807一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができること が 良いデザイナーの条件である。

頭) 101001 よいデザイナーの条件 とは，一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールが出来るデザイナーである。

尾) 111006つまり，一枚の絵を通して顧客と感性のキャッチボールができるの が，サンリオにとっていいデザイナーである。

頭) 101301 よいデザイナーの条件 とは「気持ちを描けるデザイナー」である。

尾) 111304商品デザインする際にただテクニックで描くのではなく、「気持ち」を描ける，つまり，見る人の感情を受け入れることのできるキャラクターを描けるデザイナー が よいデザイナーである。

頭) 100301 よいデザイナーの条件 とは，キャラクターの『気持ち』を描けるデザイナーである。

尾) 110307そうするためにもキャラクターの『気持ち』を描けるデザイナー が 必要なのである。

頭) 102001 よいデザイナーの条件 とは，顧客がその絵を見て感情移入ができ，そのキャラクターの概念にとらわれず見る人それぞれがいろいろな見方のできる絵をかける人である。

尾) 112001デザイナーが完璧をめざして絵の中に何でも入れてしまおうとすると逆にデザイナーと顧客との感性のキャッチボールができなくなってしまうので，顧客がその絵を見て感情移入ができ，そのキャラクターの概念にとらわれず見る人それぞれがいろいろな見方のできる絵をかける人 が デザイナーとしてふわさしいのである。(注：文章全体が1文のみ。)

6-2) 頭)「は」—— 尾)「こそ」

頭) 101201 よいデザイナーの条件，それ は キャラクターに感情移入してキャラクターを描くことのできるデザイナーである。

尾) 111203 そう いった顧客の心理をうまくつかんで感情移入することのできるキャラクターを創造できるデザイナー こそ 良いデザイナーとなるのである。

### 6-3) 頭) は1文, 尾) は2文

頭) 100201 サンリオにとって よい デザイナー とは 顧客の感性とキャッチボールできるデザイナーのことである。

尾) 110203 そんな キティを書くデザイナー とは , 顧客の感性とキャッチボールできるデザイナーである。110204 そして , そんな デザイナー こそ , サンリオが必要としている人材なのだ。

頭) 100401 よい デザイナー とは 絵を通して客と感情のキャッチボールができる人である。

尾) 110403 そのための デザインをするデザイナー は 絵を通して客と感情のキャッチボールができるような人ではない。  
110404 それが よい デザイナーの条件である。

### 6-4) 頭) 「が」——尾) 「は」

頭) 100501 キャラクターの気持ちを描くことができ、1枚の絵を通して顧客とキャッチボールができるデザイナー これが サンリオの求める よい デザイナーの条件である。

尾) 110506 しかし , キティの例にも見られるように、サンリオ は キャラクターの気持ちを描くことができ、1枚の絵を通じて顧客とキャッチボールができるデザイナーを求めている。

6-1の例では、頭括型の冒頭文の提題表現と叙述表現が、尾括型の末尾文では、逆に叙述表現が提題表現に、提題表現が叙述表現になっている。さらに、尾括型の末尾文に「こそ」が使用されている6-2の例、尾括型の末尾文が2文になっていてかつ「こそ」または「が」が使用されている6-3の例がある。しかし、題述関係の逆転した文が末尾文になる場合として、「よいデザイナーの条件とは」で始まる文と、「よいデザイナーの条件である。」で終わる文もともに文章構造上の機能としては、終結部に位置する文であることがこれらの例からはわかる。

例9の提題表現の使用において興味深いのは、単に話題となる名詞句に提題の助詞として「は」「が」のどちらかを選択するかという問題ではないということである。これは文法的な文の性質全体の問題だと言える。何を話題として提示するか、という話題の連鎖の部分だけ取り出して文章全体の分布状況を分析したり同じ話題の連鎖の切れ続きを分析したりするだけではこのような文章における文の性質に関わる現象は解明できない。提題表現という枠組み以外にも、文法的な文の性質も含めた文章構造分析の枠組みも必要である。

#### 4. まとめ

以上、出現位置と文章論の枠組みにおいて要約文を対象に頭括型の冒頭文と尾括型の末尾文の分析を行った。その結果を以下にまとめる。

- (1) 頭括型の冒頭文の統括機能は、文章の冒頭という文の出現位置によるものである。頭括型の冒頭文は、文章を統括する機能を有する形態上の特徴で冒頭文であることを示さなくても、冒頭に来るといふ文の位置によって文章全体を統括する文になりうる。
- (2) 尾括型の末尾文の統括機能は、文章の末尾という文の出現位置だけでなく、文章を統括する機能を有する形態上の特徴にもよる。その形態上の特徴は、先行文脈を受ける接続表現や指示表現のほか、提題表現、叙述表現がある。
- (3) 文の出現位置と文章論の枠組みからの分析のほかに、文章における文の文法的な性質も分析できるような枠組みが必要である。本稿のデータでは、提題表現は単なる「は」「が」の選択以外の問題があることが明らかになったが、これは話題の選択、すなわち何を話題として名詞句として取り上げるかという問題だけではないと考える。題述関係の逆転した文が末尾文に「が」または「こそ」により使用されるといふ点で、末尾にくる文の文法的な性質を問題にすべきである。

#### 参考文献

- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版  
樺島忠夫 (1979) 『日本語のスタイルブック』 大修館書店  
樺島忠夫 (1983) 「文章構造」 水谷静夫編 『朝倉日本語講座5 運用Ⅰ』 朝倉書店

- 木戸光子 (1992) 「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』第55号 表現学会 pp. 9-19
- 木戸光子 (1997) 「文の配列における文の機能の認定——文章からみた表現としての事実と意見」『日本語教育論集』第12号 筑波大学留学生センター pp. 1-10
- 木戸光子 (1999) 「接続表現と列挙の文章構造の関係(1)」『文芸言語研究 言語篇』第36号 筑波大学文芸・言語学系 pp. 69-87
- 木戸光子 (2001) 「接続表現と列挙の文章構造の関係(2)」『文芸言語研究 言語篇』第40号 筑波大学文芸・言語学系 pp. 41-55
- 木戸光子 (2002) 「接続表現と列挙の文章構造の関係(3)」『文芸言語研究 言語篇』第42号 筑波大学文芸・言語学系 pp. 51-62
- 佐久間まゆみ (1986) 「論説文の文章・文段構造と要約文の類型について」『日本語教育論集』第2号, 筑波大学留学生センター, pp. 1-29
- 佐久間まゆみ編 (1989) 『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- 佐久間まゆみ (1999) 「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学文学部紀要』第48号, 日本女子大学
- 佐久間まゆみ (2002) 「接続詞・指示詞における文脈展開機能」『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店, pp. 119-189
- 佐久間まゆみ (2003) 「文章・談話における『段』の統括機能」『朝倉日本語講座7 文章・談話』北原保雄監修・佐久間まゆみ編, 朝倉書店, p.91-119
- 佐久間まゆみ (2006) 「文章・談話の分析単位」『言語』Vol. 35 No. 10 pp. 65-73
- 杉田くに子 (1994) 「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴——文配列課題に現れた話題の展開——」『日本語教育』第84号 日本語教育学会 pp. 14-26
- 杉田くに子 (1996) 「日英対照レトリック 文章の流れはいかに文節されるか」『アメリカカナダ大学連合日本研究センター紀要』第18号
- 館岡洋子 (1996a) 「文章構造の違いが読解に及ぼす影響——英語母語話者による日本語評論文の読解——」『日本語教育』第88号 日本語教育学会 pp. 74-90
- 館岡洋子 (1996b) 「文章構造と要約文の型」『アメリカカナダ大学連合日本研究センター紀要』第19号, pp. 29-51
- 中井陽子 (2003) 「話題開始部・中間部・終了部で用いられる評価表現」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会, pp. 23-235
- 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編 (1990) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
- 永野 賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (2002) 『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店
- 本名信行 (1989) 「日本語の文体と英語の文体——言語使用の背景にある文化と社会」『講座日本語と日本語教育5 日本語の文法・文体(下)』山口佳記編 明治書院 pp. 363-385
- 渡辺文生 (2007) 「ストーリーを語る日本語の文章における主観的表現について——



母語話者と非母語話者の作文をとおして —— 』『山形大学人文学部研究年報』第4号, pp. 67-78

付記 本稿は表現学会第44回全国大会（2007年6月3日（日）龍谷大学）における口頭発表の内容に加筆し修正を加えたものである。